

森為三先生の思い出

樋口 清一

- 動物学概論、動物形態学の講義を受けました。

絵、図解が大変上手で黒板一杯に動物の絵を描き、部位を英語でサラサラと書かれた。たまにスペルが出てこない、チョークの手で耳の後ろを搔くとスペルが出てくる仕草が印象に残る。

- 講義は大変丁寧であった。その頃の講義は先生が自分のノートを読んでメモさせるだけの講義が多かったが、森先生はいわゆる授業方法で黒板や図表を使った講義だった。

- 助手をしていた人の話を聞いたところ、

- 牛肉が好きでよく自分も食べさせてもらった。当時高価であったのでうれしかった。

- 当時学長と副学長の送迎には専用車があったが、森先生はいつも歩いて通勤していた。

- 昭和 20 年代住民がアメリカザリガニを持参し、何かと森先生に尋ねたが先生は初めて目にするもので判らなかった。エビともカニとも区別がつかないので、苦しまぎれにエビガニと答えた。その「エビガニ」の言葉が丹波に広がった。後年に先生は大失敗と苦笑された(父、繁一の話)。年配の人は今も「エビガニ」と呼ぶ。

- 香住で臨海実習があり、学生と一緒に宿泊された。将棋が好きでよく学生と勝負をされた。大勢がその将棋を囲んでいるとき、先生が小さな屁をして澄ました顔で将棋を指しておられた。学生が「臭さ！」と叫ぶと、「ばれたか」と云って何のこともなかったように将棋を続けていられる態度はさすが大陸的と思った。

- 昭和 20 年代の終わり頃、父・繁一は魚を調べていたので、森先生と親交があった。私はまだ中高校生の頃、魚取りに同行した。森先生陣頭指揮で当時も禁止されていた薬物を流して川に棲む魚を全部獲ったことがあった。お盆で人が田にいない日を狙って、デリス粉末を流し、200m × 5m 位の川の魚を全部持ち帰ったことがあった。学生も数人参加していたが、死んだ魚はすぐに白い腹を向け川底に沈むので、住民に知れるのを恐れて拾うのに必死だった。その数はバケツ数杯もあり、自転車で持ち帰るのも大変だった。



2011年2月17日兵庫県立人と自然の博物館で撮影

左から朴景花、鈴木武、韓弘栗、仲井啓郎、阪口正樹、樋口清一、永吉照人。